

早期に母性喪失と外傷を被った40歳の女性で、知的職業において成功を収めているが、孤独でひきこもりがちな生活をしていて、人の顔に特異な関心と不安を抱き、治療者Beebeの顔を見ることができなかった。この患者にBeebeはきわめて共感的に聞き入り、彼女の希求に応答し、対面する距離を縮めたり、面接場面でのBeebeの顔のビデオ録画を導入しそれを患者に見せて話し合ったり、電話でのセッションをもったり、きわめて柔軟に対応している。Beebeは患者に「心を動かされ」、患者に「マッチ」しようとし、途切れ途切れの彼女のフレーズをよりまとまりのあるリズムに乗せて、語尾のイントネーションを上げて問いかけの形で繰り返している。そしてこういう接近によって両者の相互交流がいかに行進し変化してゆくかをきわめてヴィヴィッドに提示している。ここでBeebeは、中立性と距離を保ち解釈のみを行う古典的分析家とは異なり、患者の表情や動作や語りに「マッチ」し、「新しいかかわり合いのパートナー」としてふるまい、患者が過去に経験したものとは異なる相互交流を実現しようとしている。私にとってはこの章がもっとも印象的であり、枯れかけている自分の感受性に再び水を注がれる思いがした。

第5章は伝統的分析家Jacobsによる、また第6章は精神分析的治療と神経科学的所見を照合しようとするPallyによる学際的観点からの討論であり、いずれも大変刺激的である。

本書はきわめて内容の濃い、それゆえに読むに努力を必要とする本であるが、それに見合う知的刺激を与えてくれることは間違いない。

原書 Beebe, B. et al.: Forms of Intersubjectivity in Infant Research and Adult Treatment.

自閉症孝現簡記

石坂好樹著

星和書店、四六判198頁、2,800円、2008年2月刊

(大正大学大学院人間学研究科臨床心理学専攻) 小林隆児

本書は「自閉症」なる概念がどのようにして作られてきたか、社会的背景を丁寧に描写しながら、その歴史を概説し著者の論評を加えたものである。

最初に、今日からみて「自閉症」と考えられる子どもの病態がいつ登場したのか、それを野生児の報告を素材に展開していく。そこで取り上げられているのは、1800年にアヴェロン山の森の中から発見された「野生児ヴィクトール」、1828年にニュールンベルクで発見され、長年地下牢に閉じ込められていたと考えられてきた「カスパー・ハウザー」、1926年に狼の子と一緒にインドの洞窟から発見されたとされてきた「狼っ子カマラ」の3例である。当時、学者がどのような考えに基づいて診断や治療にあたったか、可能な限りの資料にあたりながら詳細に論じている。これら3例の行動特徴を整理すると、今日の診断基準に基づけば、「自閉症」に該当すると著者はいう。そして、彼らが当時から今日まで多くの研究者によってどのように捉えられてきたかを振り返り、「白痴」「野生児」「隔離性痴呆」「自閉症」と、いろいろな用語で呼ばれていたことを明らかにする。当時の社会的、学問的背景を考慮して初めて理解できる診断と原因の変遷である。よって、「自閉症」という呼称もいずれ近いうちに消滅すべきものだという。

ついで「自閉症」がつい最近まで「精神病」の枠組みで考えられてきた歴史を紐解いてみせる。DSM、ICDの時代に育った若手の精神科医師はほとんど見聞きしたことがないかもしれないが、評者には駆け出しのころよく学んだ懐かしい内容である。ここで論じられている歴史を知ると、小児精神病なる概念がかなり怪しい曖昧なものであったことがわかる。

最後に、今日の発達障害としての「自閉症」概念に至る歴史が述べられている。わが国の「自閉

症」研究の歴史の中でもっとも有名なもののひとつである牧田一平井論争にも触れながら、両者が各々の恩師であるカナーとアスペルガーの理念に固執せず、両者の連続性を考える視点をもち合わせていたならば、わが国からアスペルガー症候群を発信することができ、世界の「自閉症」研究をリードできたかもしれないと著者は残念な思いを込めて述べている。

これまでの「自閉症」概念の歴史を振り返りながら、著者の主張はどこにあるかといえば、そこでは小澤澄（1984）の主張を全面的に取り上げながら、以下のように解説する。つまり、自閉は対人関係の質によって生じてくる現象であって、症状ではない。よって、対人関係の質の変革こそ重要であるという。しかし、現実にはいまだ「自閉症」の原因探しが盛んに行われていることを嘆く。そして、昨今の発達障害概念の拡大にも批判的な目を向け、「自閉症」という病名は廃止されるべきであり、発達障害でもないとの立場を主張して本書を終えている。

評者の率直な感想をいくつか述べて締めくくることにしよう。

今日「自閉症」と考えられる病態が過去どのように報告され、それがどのように処遇されたか、その理解には社会的背景を考慮することがいかに大切か、多くの文献を引用しながら、丁寧に述べられている。このような歴史について学ぶ機会をもてなかった臨床従事者にとって大いに参考になるだろうし、刺激にもなる。ただ、肝心の著者の主張は宣言だけで終わっている。あとがきに記されているが、本書は上巻であって、下巻は未完成だという。一冊の完成された書であるとの予想をもって読んだ評者は拍子抜けの感がしなくてもない。ぜひとも一日も早く下巻を完成していただきたいものである。

著者は「自閉症」は発達障害ではないという。

著者の主張に頷ける一面はあるが、ここで重要なことは結局「発達障害」における「発達」の意味がこれまでの歴史の中できわめて曖昧なままでやり過ごされてきたことが最大の問題ではないのか。われわれが今日「自閉症」と呼ばれている人々に日々触れる中で目にしているのは、「対人関係の質によって生じてくる現象」つまりは「発達」という現象そのものではないのか。「発達」の構造がどのようなものか、それに対してわれわれはいまだ答えを出していない。その説明が「自閉症」とは何かという疑問への回答にもなるのではない。

ただひとつだけ疑問を述べておきたい。まず書名の「……^{ふく}記」についてである。周辺の何人かに読み方と意味を尋ねたが、誰ひとり正解を言い当てることはできなかった。評者は角川大宇源（1992）を引き、「書物を読んで得た感想や考えなどを随時書き記したもの」（p.1332）であることを初めて知った。評者の無学をあらためて思い知らされたが、それにもまして抵抗を感じたのが本文の中に頻出する旧字体の漢字の数々であった。著者にはなんらかの思い入れがあるのだろう。本書に登場する古い文献に合わせて懐古調にしたのではなかろうが、その点についてはなんら説明がないのでわからない。なぜ読みづらい旧字体をことさら使用したのか、なぜ出版社もそれを許したのか、評者にはその積極的な意図はつかめないままである。一冊の書を世に送り出すことは、著者の思想を世に問う作業である。少しでも多くの読者に理解してもらおうとする態度は不可欠なはずである。その意味からすれば、最初から読者の心理的抵抗を誘うような書名と旧字体の多用には残念ながら最後まで評者は共感できないままであった。啓蒙的な内容の書であるだけに残念な思いである。下巻ではそのことにも一言触れてもらいたいものである。